



TITLE:

[書評] 小尾郊一「中國文學に現われた自然と自然観：中世文學を中心として」

AUTHOR(S):

笥, 文生

CITATION:

笥, 文生. [書評] 小尾郊一「中國文學に現われた自然と自然観：中世文學を中心として」. 中國文學報 1963, 19: 134-144

ISSUE DATE:

1963-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177164>

RIGHT:

漢賦の敘述は、完成者としての司馬相如にその重點をおくが、注目すべきことは、宋玉の風賦を手がかりとしてのべられる漢賦の一般的性格についてである。即ち、賦の主要な機能は敍べることであるが、その人物や風物の純粹な描寫と共にまた教訓戒告という道德的意義をその目的として持つており、その二つの何れに詩人自身の重點があるか、なかなか見定めがたいばかりが多いという。例えば論争の形をとるばあいなどにも、その何れに詩人の立場があるかは單なる道德的判斷によつてはにわかに決しがたいものがあるとして、楊雄の長楊賦や枚乘の七發についてその論がなされるのである。この點の敘述は特に生彩のある部分で、その主張はもはや賦だけの問題ではない中國文學の全體にもかかわる問題として、示唆的な大きな意味を持つと思われる。漢賦のあとには、大風歌以下の楚歌と樂府詩とについての略述があるが、紙幅もこえたことで、省略する。

以上で、簡單ながら、この書物の特殊性と新鮮味とについての重點的な記述を終わる。この書が凡庸な概説書でな

いことは、よく理解されたであろうと思う。總括的な視野の廣さと共に個別的な問題についての鋭い示唆に富む發言も隨所にみられるから、ひろく學界を益するものであることはいうまでもないが、特に歐米の學界に對しては、その今後の發展のうえて大きな貢獻をとげていくであろうことは明白である。なお巻頭の下・バリー教授の前言によると、この書は、コロンビア大學の東洋學委員會によつて企畫された東洋思想・文學入門叢書の第一冊として出されたものである。同委員會は、現在アメリカ屈指の活動を行なつてゐるが、これにつづく良書が續々と刊行されることを期待したい。

(東北大學 金谷 治)

小尾郊一「中國文學に現われた自然と自然觀
—— 中世文學を中心として ——」

東京 岩波書店 一九六二年十一月 六五〇頁

この書物は、著者の六朝文學に關する長年の研究の成果であり、集大成ともいえるものであつて、その後記にも見

えるように、過去十數年にわたつて各誌に發表してこられた九篇に及ぶ論文を骨子として出來あがつたものである。

著者は、まず序章「魏晉文學にさきたつ自然の敘述」において、詩經、楚辭、漢賦、古詩十九首などで、どのような種類の自然が詠みこまれて來たかを簡単に概観したあと、第一章「魏晉文學に現われた自然と自然觀」で、「悲秋」の詩の發生と定着、及び隱遁思想の流行によつて、自然への親しみが増し、次第に自然そのものを遊樂の場所とする考えが出てきたことを、豊富な資料によつて詳論される。

第二章「南朝文學に現われた自然と自然觀」では、山水詩の標幟を打ち建てた謝靈運や謝朓を中心とする、詩にあらわれた自然描寫の特徴、及び、當時盛んにつくられた山水遊記など、散文にあらわれた自然描寫の特徴（後者の場合は、今は散佚してしまつた資料の復原と比較にむしる重點がおかれてはいるのだが）が、これまた豊富な資料によつて述べられ、あわせて、當時のかかる文獻に頻繁にあらわれる「賞」の字が、過去どのように使用され、當時どのような意味で使われていたかをさぐることによつて、自然鑑賞の態度が

どのように選り變つていったかを詳細に論證される。第三章「北朝文學に現われた自然と自然觀」では、王褒、庾信を中心に、かつては南朝文學の擔い手だつた人たちが、北方的な自然をどのように描寫したかをごく簡単に概観される。しかしこの方面に關する論文は過去發表しておられないこともあつて、さかれた分量はわずか二七頁しかなく、この章は、一冊の書物としての體裁をととのえるためにおかれただけのものであらう。最後の「結語」では、六朝時代につちかわれた自然鑑賞の文學が、唐代以後どのように繼承され變化していったかが、略述される。

この書物の輪廓は大體以上の如くであつて、著者の力點は、もつぱら第一章と第二章におかれてゐる。敘述が多少片寄つたり、重複したり、或いは不十分であつたりする部分が、まま見うけられるけれども、これは本書の成り立ちからいつて、まずやむを得ないことであらう。ところで、本書の章を追つての詳しい紹介と批評は、すでに高木正一氏によつてなされているので（『立命館文學』一九六三年四月號）、ここではただ私がこの書物を讀んで得た卒直な感想

や疑問をいくつか綴ることのみに止めたい。以下に草する文は、著者の意圖せられた本筋とは多少かけはなれたり、或いは的はずれのことになつたかもしれないが、あらかじめお許しを願つておきたい。

さて本書が最も大きな特色は、何といつても、著者が多年にわたつてたんねんに集められた資料を、殆んど網羅的に引用紹介しておられる點にある。蘭亭詩に關する資料や、各種山水遊記類の斷片の蒐集など、これだけでも本書のもたらした功績は大きく、この方面での從來の文學史の空白をうづめるに足るものであらう。また賞心、賞愛などという時に使われる賞字の意味をさぐり、ひいては六朝時代の自然美鑑賞の態度をさぐるために集められた數多くの賞字の用例など、これを一つ一つ讀んでゆくだけで、もはや著者の目的は十分に達成されている、と感ぜられる。おびただしく引かれる資料は、註釋や解説を加えられることは殆んどないけれども、おおむね懇切丁寧な訓讀がほどこされ、大體の意味はつかめるように工夫されている。例えば、謝靈運の「始寧の墅に過る」詩を引かれた場合の一

部を示せば、次の如くである（一六六頁）。

山行あるきして登のぼり頓とんだりを窮きまめ

水渉わたりして洄くわい渚しよを盡きくす

巖いづみは峭けいしくして嶺か疊さなり

洲あそは繁ゆふりて渚しよは連綿れんめんく

ところで、著者がこの六百頁を越す大冊のなかで、終始一貫してとつておられる、いわば資料第一主義的な方法が、幾多の面で大きな成果を收め得たことは、すでに高木氏の書評でも觸れられている通りであり、ここにくりかえすまでもないことであるが、同時にまた私は、著者のとられたこの方法に對し、卒直にいつて、不安と危惧の念を、たびたびいだかざるを得なかつたのである。つまり、資料の網羅的な引用紹介に著者の力がそがれるのあまり、そこからひきださるべき批評なり結論なりが、ともすれば表面的な現象を大づかみに指摘されるに止まつてしまつたために、資料の單なる羅列に終つてしまつている場合がしばしばみうけられるからである。著者は何か資料の重みに安易にもたれかかつておられるのではないだろうか。例えば、「梁

陳の自然を詠じた詩」(三一五頁以下)についての敘述を見てみよう。この時代の詩から、單に山水、自然現象、自然物が詠みこまれているものというような漠としたことで、

「山水をうたう詩」の例をあげてゆけば、著者もいわれる如く、「當時の詩の、どの一つを取り舉げてみても、自然に觸れない詩は無いと言つてもよい」(三一六頁)ことになつてしまふ。著者は、それらを一應整理分類して、一、山に遊び、溪谷に遊んで山水美を詠じた詩、二、江水に遊び、江水の上りや、江水の岸の風景を詠じた詩、三、行旅の途中において、山水の美を詠じた詩、四、高處に登り山水を眺望して、その景色を詠じた詩、とし、それぞれに數首づつ、全部で十三首の詩を引用し、幽邃美を詠じているとか、鮮やかな色彩感を出しているとか、清冽な山水が想像されるとか、蕭瑟たる山水の景色が詠われているとか、風光明媚な山水を綺麗にうたいあげているとかいつた解説を加えたあと、次のような結論を下される。

「以上を大觀してみると、要するに、作者の遊覽とか、行旅によつて、その眼に觸れた山水の景色が描かれていることが大

部分であつて、この場合、作者の自然に對する態度は、自然を、眼を楽しませる美しいものであると觀て、積極的に詠じようとしている。つまり、こうした自然觀の原因の一つは、彼らの遊樂や奢侈の生活に起因する。宋・齊・梁・陳と續く、天子を中心とした貴族公子の遊樂や奢侈の生活は、彼らをして、山水への遊樂に驅りたてたことであらう。かかる遊樂の場において觀る山水は美しい。かくて現われたのが、右のような美しい山水を捉えた諸々の山水詩であらう。嘗つて隱遁思想によつて芽生えた山水詩は、今や遊樂思想によつて、さらに大いなる發展をしたと言つてもよい。……」(三二七頁)

たしかに遊樂思想によつて、山水の美そのものを直接にうたう詩が増えてきたことは、容易に首肯できる。しかし、山水詩が、それによつて「さらに大いなる發展をした」ということについては、實のところ、具體的に何がどのように發展したのか、資料を與えられただけの讀者には、にわかに理解を得ることは困難である。先ほどあげた山水詩の四つの分類にしても、それは山水描寫の分類ではなく、詩人が對象にした山水の分類でしかない。生の資料を豊富にあつめて來て整理分類されるだけでなく、更にその分析と

検討が加えられていたならば、著者の論證はもつと説得力をもつたものになつたのではないだろうか。

本書の敘述がもつ第二の特色は、著者が、引用された資料そのものによつて、極端にいえば、資料の字面にあらわれたものだけによつて、議論をたてようとされていることである。このような方法は、例えば、「悲秋」秋を悲しいものとしてとらえる感覺の發生と定着を論ぜられたなかで、魏晉の文學作品に描寫される秋が、その大半は禮記の「月令」の景物から一步も出ていないことを論證される場合（一〇四頁）などでは、大いに成果をあげている。しかし、その秋という季節が、「詩經」と「楚辭」では、どのように歌われているかを比較検討されたような場合には、一體どうなるであろうか。著者は、例によつて豊富な引用によつて調べあげた結果、詩經の詩人の自然觀は甚だ素朴であり、身邊の個々の事態を捉えることはあつても、季節としての秋を捉えることはない。つまり、悲秋の感情はまだ發生していないとし、それに對して楚辭は、秋の景色に孤獨の寂しさを感じ、生命のはかなさを感じており、これは更

に進んだ自然觀であるとして、その相違の原因を次のように考えられる。

「これは時代の相違であり、また言いふるされた考え方ではあるが、北と南との人情の相違でもあらう。そしてその違いの出るのは、結局、土地の相違でもあらう。つまり氣候、風土の違いから、かかる相違が出たのであらう。」（九八頁）

表面にあらわれた現象そのものの相違が、著者のいわれるとおりであることは、その數多くの證據によつてもうなずけるし、その點では、この様な比較の方法は、確かに成功しているかにみえる。しかし、その相違が一體何に基くのか、先の説明では、讀者の十分な納得は恐らく得られない。少くとも、詩經の詩人たちが、おおむね名もしれぬ民衆であり、さすればこそ秋を收穫の季節としてむしろ楽しいものとしてさえも捉えているのであり（九〇頁に著者はその例をあげておられる）、楚辭を作つた人々が、もはや複數の人間ではなく、上層階級の間人、いわばインテリである、というようなことを全くぬきにして、悲秋の感覺を論ずることは、非常な危険をとまなうのではなからうか。詩經と

楚辭の自然描寫の比較は、本書の初めでもなされており、「自然が、情志を抒^よべる手段として用いられている點では、詩經と相違はないが、楚辭の方がより抒情詩的である」(二六頁)とか、「詩經の詩人は、身の廻りの現實の自然のみを眺めているのに對して、楚辭では夢想の自然を描いている」(一九頁)なども述べられている。しかし、ある一つの文學作品の作られた背景を考慮に入れることなしに、その中から自然描寫のある部分だけをぬきだして來て、そのままぶつづけに比較し分析してみても、そこに引き出された結論から、更に重要な結果が生れてくることは稀であろう。著者が、魏の明帝の「步出夏門行」、阮籍の「詠懷」詩、晉の潘岳の「悼亡」詩を、「孤獨感を現わすために、秋の季節感を利用したもの」として、いつしよにあわせ論じておられる(七六―九頁)のなどを見ると、一層この感を深くする。季節感利用の問題が云云される前に、まず孤獨感そのものの慎重な分析が必要だつたのではなからうか。でないと著者のせつかくの意圖も、單なる表面的な現象の指摘に止まつてしまうことになるだろう。上記の三首の詩

に現われた孤獨感は、それぞれ單に、孤獨の寂しき、疇^{もと}匹^{もと}なき羈^た旅^びの寂しき、妻を亡^なくした悲しみ、としか説明されていない。まして、陶淵明の描く秋の景色は清涼新鮮であることを述べられたあとで、「己酉^{きゆう}の歳の九月九日」の詩を引用され、「古より皆没^{ほろ}ぶことあり、之を念えば中心焦^こる」とうたつてはいるが、この秋景に、さして悲哀や憂愁の感情をこめているようには思われぬ。(一一五頁)と論斷されるに至つては、これはもう無意味であるというようなことではすまされまい。たしかにこの詩には、「清氣にて餘りの滓^{かす}澄み、杳然^{はるか}に天界高し」(第三聯―以下著者の訓に従う)という句があり、これだけを切りはなしてみれば、なるほど清涼新鮮であるといえるかもしれない。しかし何故ここにこの句があるのか。はじめの二聯はこうである。「靡^び靡^びとして秋已^{すで}に夕に、淒淒^{せいせい}として風露交^こなり、蔓草は復た榮^はえず、園木は空しく自ら凋^{しほ}む。」つまりすべてを肅殺してしまつた秋の終りの光景として第三聯があるのであり、更に冬の到來を告げるものとして、第四聯「哀しき蟬は響きを留むる無く、叢^{むら}れる鴈は雲霄^{くも}に鳴く」が續いてい

るのである。自然界の推移を、それは當然人間にもおとずれるさけられぬ運命として詩人が凝視している、と考えるのでなければ、あとに續く「古より皆没ぶことあり、之を念えば中心^{こころ}焦る」の句が宙に浮いてしまう。それを悲哀や憂愁の感情（それが如何なる性質のものであるかまでつこんでは考えられていない）がこめられていないといわれたのでは、少くともこの詩はぶちこわしになつてしまふだろう。ただでさえ複雑な詩人である陶淵明を理解するためには、著者のとられた方法だけでは恐らく無理なのではないだろうか。のちに「田園詩人、陶淵明」という一節（二二五—三三三頁）をたてて、彼の描く自然が閑、靜、和、穆であると、論じておられる場合でも、私は同じことを感ずる。

第三に、私をとまどわせたのは、著者が博引傍證、非常に慎重な態度で筆をすすめておられる反面、しばしば一方的な獨斷を下されたり、全く論證ぬきに結論だけを與えられたりすることである。例えば、司馬相如と王褒の賦を比較されて、

「司馬相如の世界は現實を誇張するのであるが、王褒は夢想

の世界を描くのである。したがつて讀者は、王褒の方をより美しく感ずるのである。」（三七頁）

といわれるのは、これだけでは明らかに著者の獨斷であるし、玄言詩から敍景詩への移行を述べて、

「抽象的玄理の描寫が去ると、そこに必然的に残つてくるのは、やはり山水の具體的描寫である。」（一九一—二頁）

といわれるのも、何故それが必然なのかは十分にはわからない。また西晉の人人の賦に見える遊覽あるいは行旅における自然描寫をとりあげて、

「これらは、詠物賦におけるような誇張された自然ではない。見たままを述べて、素直に表現している。換言すれば、この時代の人々は眞實の自然の姿を見得るようになったとも言えるのである。」（二五五頁）

といわれる場合の「眞實の自然の姿を見得るようになった」ということが、一體どういう意味なのか。見たままを素直に表現すれば、それがただちに、眞實の自然の姿を見ていることになる、といわれるのでは、まさかあるまい。

そもそも本書では、中國人が自然をどのようにとらえてい

たのか、それが文學にどのように特徴的に反映して來たのか、南方と北方ではどのような違いがあつたのか、時代によつてまた文學をささえた階層によつてどのような變化がみられるのか、というような問題については、必ずしも眞向から論じられていない。ただ著者の印象批評ふうな發言があちこちに見られるだけである。例えば、

「魏晉南北朝時代においては、西洋流の純粹の敘景詩などはあり得ない。ただ比較的敘景的であるというに過ぎぬ。より敘景的であるのが、謝靈運であつた。」(三四六頁)

といわれる。しかし、著者は、西洋流の純粹の敘景詩とはどんなものであるのか、どのようなものを指してかくいうのであるかについては、何も示されていない。また中國の自然詩に、何故、純粹の敘景詩があり得なかつたのか、比較的敘景的であるに過ぎなかつたのか、についても、全く説かれようとしていない。同じ頁で『景中情あり』と評されるごときものが、中國人の最もよいと考える詩であり、文學であると考え、と斷定しておられるけれども、やはり、何ら論證をしておられない。著者は恐らく自明のこと

と考えられたのかもしれないが、こうした點こそつと眞劍に追求されるべきではなかつたのだらうか。詩人を取りまく自然の大きな變化によつて、自然觀が如何に變つたか、または變らなかつたのか、従つてその自然觀がどのような性質のものであつたのか、を考えるのには、恐らく絶好の對象となるべき、庾信についてさえも、著者は次のようなとらえかたしかされてはいない。

「彼(庾信)の自然觀は、北方の自然に對しても、南方におけると同様、自然は眼を楽しませるもの、行樂にふさわしいものとして考えられている。北方に移つてからも、南方的自然が北方的自然に易えられただけであつて、彼の自然觀には變りはない。」(五九六頁)

第四に、資料の翻譯について、ひとこと氣のついたことを記しておきたい。はじめにも觸れたように、引用資料には、原則として思いきつてくだけた訓讀がほどこされている。恐らくいちいち註釋を加える煩をさけるために著者とられた處置であらう。いま一度その例を示しておく(一九頁)。

山は蕭條しく獸無く

野は寂寞しく其れ人無し

營魄を載きて登霞り

浮雲に掩つて上征る（屈原「遠遊」）

これまで一般にあまり紹介されたことのないような資料をふんだんに含んでいる本書において、ともかくも、その殆んどすべてにわたつてかかるだけた訓をほどこされた著者の努力は、大いに買われるべきであろう。もちろん一つの單語にくだけた訓を與えたからといつて、それがただちに分り易いことになるかどうかは一應別問題であるけれども。例えば、いまあげた「遠遊」の別の部分にあてられた訓をすこし検討してみよう（二〇頁）。

余が車の萬乗を屯め

紛れ溶與に並び馳す

八龍の婉婉たるに駕せ

雲旗の逶蛇たるを載つ

二句めの「溶與」という單語に對して下された「ゆるやか」という譯は、その「rūng-yū」という音からしても、

日本語としては恐らく一番びつたりした譯であろう。だが、たとえ單語としてはそうであつても、それでこの句の狀景が適切に表現されているかどうかは、更によく考えてみねばなるまい。洪興祖は、この語に「水盛也」と注している。恐らく、彼は、萬乗の馬車が、ひしめきあいながら、とうとうと流れる大江の如く行進している様を頭に描いていたのではないか。その點で、「ゆるやか」という訓が、この句のニュアンスを十分に傳えきれているかどうか。もちろんかくはいつてみたものの、著者以上のうまい譯をさがしてくる自信は、筆者にない。訓讀という方法に頼る以上、そこにはどうしても大きな限界があるのであつて、三句めの婉婉、四句めの逶蛇が音のままでしか示されていないというアンバランスも、やむをえぬことかもしれぬ。こうした場合、單なる言葉のおきかえを試みただけではどうにもならないのであつて、いまさらのごとく翻譯の難しさを痛感させられる。なお、委蛇の音は、王逸が「蛇一作移、一作逶迤」と注し、洪興祖が「委於爲切、蛇弋支切」と補っているごとく、委蛇であつて委蛇ではない（「離騷」に第

三、四句と同じ句があり、その注にみえる。

その他、本書に關して、山水詩の發生と隱遁思想の關係をしきりに云云されるにしては隱遁の分析が不十分であること（一口に隱遁といつても、郭璞の場合、陶淵明の場合、謝靈運の場合などでは、いろいろ質的な違いがあつたはずである）、著者自身が「山水詩の標幟を打ち建てた、晉末宋初の大詩人」といわれる謝靈運についての記述がわずか一五頁しかないこと（そこでは要するに「清く」「明るい」自然が描かれているということしか述べておられないために、なぜ謝靈運の山水詩がみごとに成功をおさめているのか、他の詩人とはどの點でとびぬけているのかといったことについては十分な理解が得られない）など、色々身勝手な注文があるけれども、ここではこれ以上述べない。

以上、私はもつぱら本書に對する不滿を述べることにのみ急であり、私が興味を感じた點ばかり一方的に書きたてたきらいがないでもない。しかし、私がこれまでに提出して來たいくつかの問題は、もちろん著者一人に課せられたものではない。われわれ中國文學を研究するものにとつて

それは共通の課題であり、その解明こそ今後の研究者に課せられた責任でもあらう。從來わが國でのこの方面に關する研究としては、鈴木虎雄博士「山水文學と謝靈運」（大正十四年京都弘文堂刊「支那文學研究」所收）、青木正兒博士「支那人の自然觀」（昭和十七年東京弘文堂刊「支那文學藝術考」所收）や、橋本循博士「中國文學と山水思想」（昭和二十三年大阪秋田屋刊「中國文學思想論考」所收）などがあつた。本書はいわば過去のこうした研究を、あらゆる資料を蒐集することによつて豊かに肉付けしたものであるといつてもよいともあれ、本書によつて、文學史の空白をうづめるべき大きな資料が、わかりやすく訓讀をほどこして提供されたことは、著者の大きな功績であり、われわれはまたそれによつて多くの問題を知ることが出來た。この點に關してだけでも、本書が今後の研究に與える便宜ははかりしれないものがある。最後に著者が、

「實は私は中國の本土に渡つた經驗はない。……私にもし中國の言語、風物に親しむ經驗があつたならば、この書物の内容は、もつと深みを増し、もつと優れたものになつていたかも知

れぬ。」(六二八—九頁)

と述懐しておられることを紹介し、私たち中國を研究對象にしているものにとつて致命的な現在の不幸な状態が一日も早く解決するよう願つて筆をおく。

(京都大學 寛 文生)

夏承燾・吳熊和「讀詞常識」(知識叢書之一)

北京 中華書局 一九六二年九月(十一月第

二次印) 一一一頁(圖版四頁)

「詞」または「詩餘」は特殊な形式の韻文であつて(以下、便宜のため、詩餘の名でよぶ)、通常の詩とは區別される(これも便宜のため「舊詩」とよぶことにする)。舊詩の形式および作り方すなわち作詩法についての知識は中國はもとより日本でも廣く知られていて、作詩法を説いた書物は少なくない。およそ中國文學の研究者で、律詩・絕句・古詩などの名稱についての知識を有しない人はないであらう。これに反し、詩餘の形式および作詞法に關して正確に知つてい

る人は、中國においても比較的少數であるが、日本では更に少ない。

私は最近、雜誌「人民中國」日本語版の十周年記念として、或る人に贈られた毛澤東氏の詩餘「沁園春」(北國春光……)の筆蹟をそのまま刺繡した織物を一見した。私が奇異に感じたのは、全篇に句讀標點を附することであつた。今日でも自作の詩(舊詩)を揮毫する場合には句讀點を加えないのが通例だからである。しかし、これは多分作者(および刺繡製作者)の親切心からであらう。詩餘を讀むには一定の豫備知識を必要とするからなのである。

それはさておき、中國文學史において、詩餘はその *genre* の興つた時期が比較のおそく、また作家と作品の數も舊詩に比すればずっと少ない。しかし、だからと言つて、決して詩餘の *genre* が輕視または無視されてよいとは言えない。詩餘は明代に衰え、清朝に入つてふたたびさかんととなり、清末には特に隆盛をきわめ、その風行は最近までなお繼續している。詩餘が最も盛んであつたのは、いうまでもなく、唐末五代から南北宋を通ずる時代であるけれども、